

2021年3月21日(日)／説教者：國分美生

説教：「そのとき神はどこに」

聖書：創世記8:1～22

東日本大震災の後、生活面・気持ちの上でも人々の中に大きな変化が起こりました。その中でも忘れられないのは「なぜこのようなことが起きたのか」という問いが、多くの人の中からきかれるようになったことでした。「神がいるならなぜこのような苦しみが起きたのか」、「なぜこのようなことが起きたのかせめて理由を知りたい」という心境であったと思います。ですがその時「この震災は汚れた日本に対する神の罰である」という考え方が世間一般だけでなく、教会の中にもおこりました。神は本当に、怒って罰を与えるために人間の命を奪うお方なのでしょうか。

洪水物語における神は、人間に対して「怒った」とは書かれていません。そこにあるのは、人間を造ったことを後悔し、心を痛めておられる創造主の姿です。人間は神との関係を拒絶し、神を神としてあがめることを拒みました。罪は神との関係が断絶されたところから始まります。人間との関係に悩む神の深い悲しみと心の痛みが人間臭く描かれています。

洪水の間も、後も、箱舟の中のノア含め被造物たちの傍らに神がいつも共におられました。神は箱舟の中の被造物達を御心に留め、洪水を終わらせました。舟を出たノアが見たのは、慣れ親しんだ人も町もすべてが瓦礫に埋もれ殺伐とした風景であったでしょう。ですがそれでもノアが舟から降りて真っ先に行ったことは主のために祭壇を築き、捧げものを捧げることでした。その時、神は人間の遺憾な状態にもかかわらず、この世界とともにあり、忍耐し、支えようと決心され、誓いを立てます。その神の誓いと共に新しい世界が始まったのでした。その神との信頼関係に招かれている世界にわたしたちも住んでいます。わたしたちの救い主は、どこか高いところからわたしたちを他人事のように見下ろしている神ではありません。ご自分が創造した世界に責任を持ちながら、ともに痛み、苦しみ、ともに歩む神です。だからあの震災のさなかに、神はずっと一緒におられ、苦しみを分かち合って下さっていたはずです。何でこのようなことが起きたのかと、泣く人と一緒に泣いていたはずです。神がわたしたちをいつも、常に、心にとめておられるという事実は、希望であり、わたしたちの新しい人生の歩みを可能にします。わたしたちの日常のただ中におられる神のお姿はわたしたちの生きる指針となるからです。(國分美生)